
しょっぱい中年の冒険（パチンコ依存症編）

北 郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しょっぱい中年の冒険（パチンコ依存症編）

【コード】

N0011M

【作者名】

北郷

【あらすじ】

キャバクラ通いに飽きた中年男が、パチンコ依存症に陥ってしまい、そこから抜け出そうとするお話です。

今日も私を呼んでいる。

その声に、私は応えなければならぬ。それが私の生まれて来た理由なのだから。

と言う定めを勝手に自分に与えてしまった。自分に自分で与えたのだから、誰に文句を言われる筋合いではない筈である。

しかし、一人だけ微かに意義を唱える者がいた。その非力な奴も他ならぬ自分なのであった。

ここ数年、私の中にはパチンコ台魔王（解説：台と大は掛けています）が住み込みで陰謀を企てているのである。しかし、それと同時にその時はまだ非力であったのだがその陰謀を打ち砕くべき精劍の勇者”自立勃起王子”が、私の体の中央やや下部で奮闘する予定で満を持していたのであった。

ただ、私の”精劍の勇者”は、まだ眠ったままで、一向に立ち上がって文句を言うまでに至っていないのである。

台魔王の陰謀は、恐らく全国民に取り付いてパチンコ依存症に陥れようとしている。筈である。

何故ならば、40年余り一切賭け事をしなかった私が、パチンコ依存症になってしまったのだから間違いないはずである。

今日も、夕方になると聞こえるはずのない声が聞こえてくるのである。

「遊んで儲けて、遊びに行こうよー」
結構爽やかなキャッチフレーズに聞こえてくるが、要約すると”遊ぶお金は遊んで儲ければ無料で遊べるじゃん”と言う胡散臭いことになる。

1年前まで、キャバクラにハマっていたのが嘘の様である。そう、キャバクラなどは結局は虚無の世界なのである。嘘の優しさ、心のない中途半端な肉体の接触は、慣れてくると満たされない心をさらに空虚にするだけなのである。

街中でミニスカートから綺麗な御脚を披露しているお姉さんに、悪戯な風の妖精さんがチョッカイを出しているのを目撃する方が、次第によっぽど価値があることに気付いていくのである。

慣れと言う人間の機能は本当に素晴らしくもあり、恐ろしくもある機能だと思ってしまう。

その点、パチンコ（追加：パチスロも含む）と言うやつはリアルな奴であった。

私は嘘の世界からリアルを求めるばかりに、その隙を台魔王に付け入れられてしまったのである。（多分）

私は午後6時の定時を過ぎると、多少の仕事が残っていることも省みず、取り付かれた様に”パチンコ王様”（詳細：私の通っているパチンコ店）に向かうのである。

店の自動ドアが開くと、そこは閉鎖的なパラダイス。

爽やかに淀んだ空気、飛行場の近郊の様な心地よい騒音、それに店員さんの切れの良い笑顔と、とって付けた様なお辞儀。その全てが私の五感を熱くしていく。

路地裏を思わせる狭い通路で、パチンコ玉が一杯に詰まったドル箱を跨ぐ時、私の期待と嫉妬は絶頂に達するのである。

私は日を追う毎に、何気なく始めたパチンコと言うゲームに次第に酔いしれていった。

高々、直径10mm前後の銀玉が重力によって、落下する遊びにである（基本は、ではあるが）。

私は毎日をこの生活で酔い潰してしまい、ついには酔わなければ生きていけない体になってしまった。

しかし、この遊びによって、今まで味わったことのない充実感を毎日味わうことが出来たのも間違いない事実であった。

だが、この生活は体ではなく人生を蝕んでいく。網の目の様になった人生を振り返った時、（振り返るまでに3年かかったが）それが”パチンコ依存症”と言う病であることに私は気付いた。完全に中毒である。

（せめて酔拳の様に酔えば酔う程強くなれば、病のままでも良かったのだが・・・。）

「これが、そうなのか」

実際に自分になってしまうと、呆気ないものである。

初めてHをした時に、（人の命って、こんな簡単な行為位で生まれてしまっただろうか）と思った様である。

人知れず押し寄せて来たこの病気の進行は凄まじかった。

私が二十年来、特に無理もせず自然に貯まっていた人も羨む程の預金額が、今度は加速度的に自然と減っていくのだ。耳鳴りがしそのうである（恐らくパチンコ店の騒音のせいだろう）。

音を立ててく崩れていくとはこうということなのだろうか。預金が崩

れていった。

高々3年で、このままいくと後、半年後には底をつくと言うところにまでに達してしまった。

私は焦った。

「きっと、私の中には魔王がいて、誘惑しているのだ」

何故かそう分ってしまった。理由はない。そうだと分ってしまうのである。

「何とか、この魔王をやっつけて、この病を克服しなければならぬ。」「

そう思った私は、終に”パチンコ台魔王”を倒すべく、未だ眠り続けている”自立勃起王子”と言う勇者の復活を信じるに至ったのである。

信じたことに根拠は無い。魔王がいるのであれば勇者がいる筈だ。

ライトノベルズでは常にそう言うことになっている。

しかし、王子を立たせる者はなかなか見つからない。

預金の余命は、「そう、滅亡まで 後183日(半年)」なのである。

私は色々なことを試みた。プレステ、DVD、ネットゲーム、各種ブログやサイト、アニメにCS。どれも残念ながら王子を立たせるに至らなかった。

今一、インパクトに欠けるのである。

そんな絶望の中に一筋の光が射したのである。

こんな病の私にお見合いの話が持ち上がったのだ。5年ぶりのお見

合いである。

友人の紹介であったので、堅苦しいお見合いとは違い、紹介してくれた友人を交えて一緒に食事をしながら談笑するだけの気軽なものである。

彼女は、私より10歳下の35歳で、この春に今まで働いていた会社を退職して、実家の経営している会社で事務をしていることであつた。

「と言うことは、自然と跡継ぎになる。そう言うことなのだろうか？」
誰でもそう思うに違いない。

もちろん、私の返事は二つ返事である。

「します。行きます」

話はとんとん拍子に進み。一週間後にはお見合いをする運びとなつた。

しかし、好条件ばかりが幾つも並んでいる筈がない。自分のことはさておき、

(何かしら欠点があるはずだ)
そう思った。

しかし、それと同時に自分を戒める自分もいた。

私はお見合いの前日に、お風呂場で全裸になり自分の容姿を鏡に映し、自分の性欲に対し苦言を呈する。

「お前に高望みをする権利はこれっぽちもないぞ」

我の言葉が我心に染いる。

これで大丈夫だ。多少の欠点位では前向きに進めそうである。

そして、当日目の前に現れた彼女を見て驚いた。

「こんな子が世の中に残っていたなんて！伊達に1億2千万も人口がいる訳じゃ無いな」

正直そう思った。

彼女は顔の作りこそ、そこそこだが、見た目は30歳前後で、スタイル抜群。ついでに肌が綺麗で、しかも親は周知の通り、何がしの経営者。これ以上の者を望む者がいるならば、是非お会いして耳の穴から脳みそを覗いてみたいものだ。

彼女はすっかり、若い頃から若干ロリコン気味であった私の心を、すっかり驚掴みにしてしまった。

45歳から見れば、30歳の見た目等は子供も同然。と言うよりは、私に許された限界ぎりぎりラバーズである。

私は、伊達に1年間キャバクラで高い授業料を払って来た訳ではない。

ここで、鍛えたトーク術を使わないで一体、いつ使うと言うのだらうか。

お見合いの席で、私のトークは、マシンガンの様に炸裂した。

（これも、ふうかちゃんのお陰だ（説明：キャバクラで指名していた娘））正直そう思った。

会話は徐々に弾んで行く、我ながら結構いい雰囲気を作れていた。そう思った。

彼女とは性格も会話も全てが会うのだ。もちろん一方的な感想ではあるのだが。

彼女であれば、私の精劍せいけんの勇者”自立勃起王子”じりつぼつきおうじを長い眠りから覚めさせ完璧に立たせることが出来ると確信した。これで、持病の”パチンコ依存症も”完治する。漁夫の利だ。この漁夫の獲物は結構高額だ。きつと、アワビと太刀魚だろう。

私は仕舞いには、味覚が分らない位に滑らかな舌になっていた。笑いも取り始め、饒舌になった私の口は1gにも満たなかった（軽かった）。

それが災いした。人間調子に乗り過ぎると何処に落とし穴があるか分らない。

不覚にも趣味の話が盛り上がったその時に、ついうっかりと毎日病気のようにパチンコをしていると言う話をしてしまった。

「しまった」
多分顔が青ざめたことだろう。

「もう、遅い」そう思った瞬間、饒舌だったな私の舌は一気に貧舌になり、取り繕う言葉も出てこなくなってしまった。

しかし、何とこれが災いとはならなかったのである。彼女の心は寛大だった。

顔色一つ変えず、さらりと一言で流してしまった。

「私も好きですよ。プレイはしないけど」
そう、彼女は応えた。

（え、うつそー。大丈夫なんだ）
女子高生の様な言葉を心の中で発しつつ、『プレイ？』と言う、その一言にちよつとだけ引つ掛った。

しかし、私はそんなことよりも、失言にならなかったことを安心す

る方に気を取られていた。

その日は、お陰様で楽しい1日となった。

その後、とんとん拍子に事が運び、約3ヶ月の短い交際期間を経て、私達はめでたく結婚する運びとなった。

私の勃起王子は、彼女のお陰で、ついに長い眠りから覚め真の勇者となった。

真の勇者の前では魔王など、如何ほどでも無かった。

彼の振るった精剣は、あつと言う間に暗黒の台魔王を白で塗りつぶし、一夜にして私の”パチンコ依存症”は完治してしまっていた。終末なんてこんなに呆気ないものだろうか。そう思った。

そして現在に至る

今、お陰様で私は幸せな毎日を送らせていただいています。それも、そんな病の傷みをしっている筈の私が、彼女と共に人々の心の中に”パチンコ台魔王（解説：台と大は掛けています）”を送り込んでいるからなのです。

一人でも多くの患者が出ることを願っています。

今の私の仕事は、パチンコ店の経営なのです。

彼女の実家の事業は、市内近郊に3店舗を持つパチンコ店「パチンコ王様」だったのです。

この3年間、決しておろすことの無い預金をパチンコ店にし続けた

私が、今では他人の財布から引き出し続け補填しているのです。

これは、「ミイラがミイラ取りになった」か、はたまた、「患者が病原菌になった」とでも表現するべきなのでしょうか。

人として、これで・・・良いのでしょうか。

<おしまい>

(後書き)

くだらない話をお読み頂き、誠にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0011m/>

しょっぱい中年の冒険（パチンコ依存症編）

2011年2月3日01時16分発行